

十二月八日、菩提樹の下で坐禅を組み、明けの明星をご覧になったお釈迦さまは、ついに悟りを開かれました。

この日は、私たち仏教徒にとって大切な日です。

「成道」、道を成したと書き、もとは「成仏得道」、仏と成る道を得た」という意味です。お釈迦さまが仏になる道を説かれたものが仏教ですから、この日が無ければ仏教は無かったと言っても良いでしょう。

曹洞宗では、十二月一日から八日までの間、お釈迦さまの成道に因み「摂心（せっしん）」という集中的な坐禅修行が行われます。坐禅を組み悟りを開かれたお釈迦さまのお姿を慕い、坐禅修行を行うのです。そして十二月八日には「成道会」という法要を営みます。

さて、お釈迦さまの悟りとはどのようなものだったのでしょうか？

悟りを開かれたお釈迦さまは、その内容があまりにも深く難解であったため、教えを説くことをためらったと言われています。そこで、天の神様である梵天さまが地上に降りてこられ、お釈迦さまに「どうか、教えを説いて、苦しんでいる人々を救って下さい。」と、願いをされたと伝えられています。

この伝説は何を意味するものでしょうか？

お釈迦さまの悟りは、お釈迦さま自身の苦しみを救う教えであったと同時に、苦しんでいるすべての人々を救う教えでもあったということです。

苦しみとは、思い通りにならないことを思い通りにしたいという根本的な人間の欲望からうまれて来るといわれます。

命を授かり生まれるということは、人間の思い通りにはなりません。老いるということも、病気になるということも、そしていつか死を迎えるということも、人間の思い通りにはならないのです。

思い通りにならないことを、思い通りにしたいと思い悩むことでうまれる苦しみ。その苦しみから救われるには、現実をしっかりと受け止めて、心を落ち着け、正しい生き方をする。つまり、お釈迦さまが説かれた仏になる道を歩んで行くことが、最善の道であると思うのです。それが、お釈迦さまの悟りに近づくことになるのです。

仏になる道を歩んで行く修行の最も大切なものが、お悟りを開かれたお釈迦さまのお姿、坐禅なのです。

私たちは、坐禅に親しみ、お釈迦さまが説かれた仏になる道を実践することで、少しでもお釈迦さまのお悟りに近づいて行くことができます。

— 終 —